

セクシュアリティの可変性に関する考察 ——レズビアン・バーにおける当事者の語りから——

関西学院大学 小田二 元子

1 目的と方法

性の在り方は、本来多様である（フロイト 1930）。しかし、近代家族を支える規範である異性愛主義によって、同性愛は社会的に著しく抑圧されてきた。しかも、女性同性愛は、男性同性愛と比べて社会的な抑圧の度合いが高い。なぜならば、女性同性愛者であるレズビアンはジェンダーを示す「男／女」という枠組みと、性的指向を示す「異性愛／同性愛」という枠組みの両者においていずれも下位に位置づけられ、社会において二重の抑圧を抱える存在だからだ（堀江 2004）。その抑圧に抗う有効な戦術として、自身の性的指向を社会に向けて公言するという「カミングアウト」という実践が注目されてきた。渋谷区や世田谷区において同性パートナーシップ条例が成立し、マスメディアによる報道も広がる一方、「カミングアウト」や可視化への実践へと向かわないレズビアンも少なからず存在している。

したがって、本研究では、「カミングアウト」や可視化への実践へと向かわないレズビアンが、いかに社会においてその抑圧を「かいくぐって」、「レズビアン」であること”を実践しているのかについて調査、分析を進めてきた。

本報告は、2010年から現在に至るまで大阪を中心としたレズビアン・バーにおける参与観察と聞き取り調査をもとにしている。

2 結果と結論

レズビアン・バーにおける調査から、セクシュアリティの可変性が示唆された。そのセクシュアリティの可変性は以下の3点である。

まず、1点目は、レズビアンの「男役／女役」という枠組みの可変性である。レズビアン・バーにおいては、男役のレズビアンに見られるように、生物学的な男／女の枠組みと、社会・文化的な男／女の枠組みが必ずしも一致しない。女性でありながら男らしさを体現するという既存の性規範にズレを生み出すような実践が見られた。比較的年齢層の高い(30代 - 50代中心)レズビアンが集まるレズビアン・バーでは、男役から女役、女役から男役への性の在り方の変化が経験的・遡及的に語られていた。

次に、2点目の可変性として、「異性愛／同性愛」というセクシュアリティの可変性が挙げられる。異性愛者から同性愛者へ、同性愛者から異性愛者へというセクシュアリティのゆらぎは、離婚や出産を経験したレズビアンや、子どもがいるレズビアンによって語られていた。

3点目は、自身が「男性」であるか、「女性」であるか、という性自認の可変性である。自身を「男性」であり、「女性」を恋愛対象とする「異性愛者」として位置づけ、そのために医学的な施術や戸籍を変更した上でパートナーと結婚する事を望むのか。もしくは、自身を「女性」であり、「女性」を恋愛対象とする「レズビアン」として生きるのか、という性のゆらぎが当事者の経験を通じて語られていた。

本報告では、以上の研究結果において示唆された可変的なセクシュアリティのなかを生きる当事者の実践から“抑圧—抵抗”という二項対立の図式を乗り越える視点を模索する。

参考文献

- Freud, Sigmund, 1930, *Das Unbehagen in der Kultur*, (=2007, 中山元訳, 『幻想の未来/文化への不満』 光文社古典新訳文庫) 掛札悠子, 1992, 『「レズビアン」である、ということ』 河出書房新社。
堀江有里, 2004, 「レズビアンの不可視性 日本基督教団を事例として」, 『解放社会学研究』